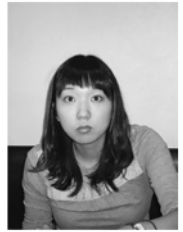


# 野沢賞

## とむらいRIDGEWAY

横浜国立大学 建築都市・環境系学科  
名前 鈴木 菜摘



尾根のふちに日常と弔うことが接する場所をつくっていく



地形に対してこの場所を通る人の目的と行為が重なる空間



### 設計主旨 concept

生者と死者を繋ぐ「弔う」という行為から新たな通りの風景を提案する。敷地は横浜市西区、南区、保土ヶ谷区をまたぐ尾根道とする。この尾根沿いの谷地には久保山墓地が広がり、尾根のふちにはたくさんのお寺と葬儀場、火葬場、茶屋、石材店、納骨ビルが立ち並び、それらを戦後にできた「まち」が取り囲む。尾根のふちに立つ弔いにまつわる場所は、不気味な場所として日常から拒まれ、道行く人にとっては地形を感じさせない壁のひとつとして立つが、塀は高く窓は小さく目的を持つ人のみに開かれる、このまち特有の公共的な場所である。

本計画では、尾根のふちに並ぶ弔うために作られた建物と日常の出会い方を再構築する。死者の家、生者の家、生者の公共、生者が死者と繋がる公共が共存するさまは、陸地から海への出会い方やそこにある生業のように地形に合わせて多様で、その続いていくことが通りの風景になり、このまちの風景になっていく。

横浜 久保山墓地の尾根沿いの道を敷地とする計画である。卒業設計は選択した敷地の力に大きく拠ることがある。この敷地選択はそうしたものの典型である。これほどの高低のある敷地全体が膨大な数の墓石に埋まる姿はほかに見ないだろう。尾根道の向こう側には生者の家々がこちら側の墓地群のように並ぶ。尾根道は生者の道でもある。そこを丁寧に整備しながら生者死者両者が調和することを図るポジティブな提案である。尾根沿いに計画された建築群、作為は手厚い。敷地の力を越えた計画自体の力である。尾根両側の調和、心からなにかホッとするようなプロジェクトである。

(講評 野沢正光)